

経営と健康

第4回

財政再建・農村復興

「報徳」一宮尊徳

講談師 一龍斎貞花



退官した元官僚から聞きました。

「日米安保条約がある限り、北方領土返還はむづかしい。日米地位協定でアメリカは日本のどこにでも基地を造ることが可能。返還すれば基地が出来る恐れがあるという。ロシア・プーチン大統領。地位協定を知っているから言われるままに武器を買い、おまけにトウモロコシまで買っている。千葉の台風被害対策遅れは行政の責任も大」と、辛辣でした。安保条約の内容を詳しく知らないの

で云々出来ませんが、元官僚の言葉だ

けに、成程そうなのかと思わされました。

二宮金次郎は、こつこつ貯めたお金で、田畑を買い戻し、増やしていきました。余りにも違いのあることを、私は書いていのでしょうか。

小田原藩飛地桜町領立て直しを命ぜられた金次郎は、雨の日も風の日も、村を回り、お釜をのぞき、肥溜を調べ、「加減の悪いことはないか、困っていることはないか」と、声をかける。

田畑を増やすための新田開発。新田の開発はある期間年貢を払わなくても良かった。

やる気、勤労意欲を高めるためでした。だが新田には水が必要。農民同士激しい水争いが行われたことは枚挙にいとまがありません。

こればかりは政治の問題。河川の工

事には膨大な費用がかかる。

金次郎は、横田村の大堰と物井村の二宮堰の用水路大改修と、高瀬川の橋の架け替えを計画。

土木工事の測量をするのに、いつも携えている杖が正確な数値を出してくる。杖で土を掘り、差し込んで土質を調べる。そのため杖は槍のように尖っていた。

ある時大勢の人夫が川ざらいをしていた時、流れが強くて集めた泥が流れてしまうのを見るや、

「川ざらいは、こうするんだ」

ざんぶと川に飛び込み、川の流れをまともに受けないよう、横さまにかき寄せ、その手際の良さに人夫たちは

「へエー、成程」と感心。

口だけでなく実際にやって見せるんですから皆納得をする。

経験にもとづく実践の人でした。

横田村の工事が山場にかかっていた。村中総出で働いている最中、お茶係の老人が、

「湯がわいた。一服どうじゃな」

「有難い」と、皆喜んで手を休め、お茶を飲んで世間話を。

と、そこへやって来た金次郎が、

「勝手に休むとは何事だ」

怒って大きなお釜を蹴落とした。一同その剣幕に恐れをなし、工事に励み、以後勝手に休むことはありませんでした。

土木工事は、気を抜くと事故になる。一寸した油断で取り返しがつかなくなることもある。金次郎はそれを知っていたのです。土木工事に限りません。老人には、訳を話しお釜の代金をきちんと弁償してやりました。

武士の復興事業妨害

農民に藩財政を握られることを快く思わぬ武士がおり、決して順調ではありません。役人の反感は強く、

「二宮のやり方は、再建どころかむしろ一層悪くする恐れがある」と、藩主に訴える者など、さまざまな妨害があつて復興事業は捗りません。

「やっぱり駄目だ」と、手を抜く者も出てくる。

文政十年、上役として赴任した豊田正作は、金次郎のやり方にとことん反対。

「言うことを聞かん二宮を斬つてしまえ」

部下に命じ、殺されそうになったことも度々。

ある日のこと。仕事終えて山道を農民たちと歩いていると、上の方でガッツと音がした。

金次郎が「オヤツ」と見上げたこの時、大きな石が転がり落ちてきた。

「危ないっ」横っ飛びに飛び退き、かろうじて避けたが、避けそこなった一人がもろに受けて転がった

「大丈夫か」

「イ、痛い」

「立てるか。駄目か、皆で担いでくれ」石が足に当り折れているようだ。

「誰かが二宮様狙つて落としたんだ」「それっ」と二、三人が駆け上がったが、曲者は逃げてしまった後。

「わしを狙つたのに、お前が犠牲になつてすまんのか」

「いいえ、わしがのろまだから逃げ遅れたんです。これからも気を付けて下さいよ」

「こんなことで仕事をやめないで下さいよ」

「うん、有難う、有難う」その後も作業は続いたが、文政十二年、用があつて江戸へ出た時、

「わしのやり方が間違っているだろうか。村人に怪我までさせてしまった。イヤ、仕事があまくいかないのは妨害のためだ」

流石の金次郎も激しい妨害に、復興事業を続けるべきか、やめるべきか、迷いに迷い、成田のお不動様にこもり、二十一日の断食修行。

断食までして一心に祈り続ける金次郎。

「二宮様が帰ってこられん。どうなさつたんだろう」

「これというのもあの豊田という侍が、二宮様を殺そうとしているからじゃ」

「本当にわし等のことを思つて、自分を捨てて先頭に立つて下されているんじゃ」

「二宮さまがおられなければ、村は本当に立ち直れん。二宮様を探しに行こう」

不動明王に一心に祈り続ける金次郎。

「わしのやり方は間違つておらん。なのに何故うまくいかないんだ。」

ウム、イヤそうじゃない、うまくいかないのは反対する者の妨害のためと決めつけていた。自分こそ正しいと考へるのはおごりで、自分に徳が無いからではないか」

謙虚でなければいかんと、自分を見つめ直したのです。

断食修行満願の日、村の代表者が成田山へ。

「二宮様、どうか戻つて下され」「わし等も心を入れ替えてご指示に従い働きます。お願いしますだ」

「わしを探し回ってくれたと、わしの勝手に迷惑をかけてすまなかつた。有難う、有難う。皆心一つに働こ

う。頼みますぞ」

この修行によって、対立を超える「一円融合」の大切さを悟つたのでございました。

「わしは総てを捨てて桜町へ赴いた。自分の身体がどうなろうと、信頼して付いて来てくれる村人のために働こう」

こう決意して村へ戻るや、なにかと妨害していた豊田は、小田原へ召し帰されていた。豊田の行状が忠真の耳に入り、帰れと命じたのです。

大久保忠真は、金次郎を信頼し、金次郎もそれに応えようと懸命でした。藩主との強い結びつきがあつたのです。

治水工事は正に戦いでした。敵は自然。自然に打ち勝つために生半可なことでは駄目。

「桜川に堰を造つて洪水を防がにやいかん。銭は五貫文出す。体力のない者は半日だけ働いてくれ。半分の二千五百文払う。だが怠ける者は、働く者を妨害するので即刻やめさせる」

金次郎の実践指導による復興作業が進んでいきます。次号ご期待ください。